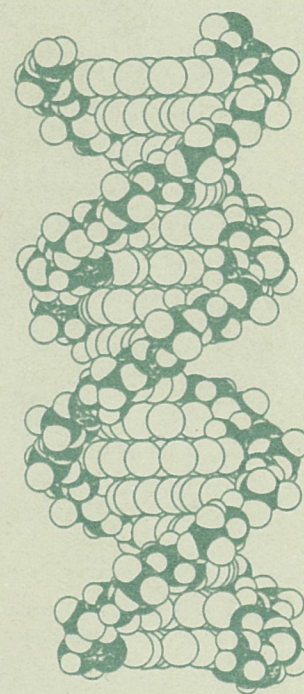


# 遺伝子

1986 1



遺伝子実験施設連絡会議

# 遺 伝 子 第 1 号

## 目 次

遺伝子実験施設連絡会議発足によせて……………	大山超 1
遺伝子実験施設の現況……………	2
第1回遺伝子実験施設連絡会議について……………	10
遺伝子実験施設連絡会議運営要綱……………	11

遺伝子は遺伝子実験施設連絡会議のサーキュラーです。遺伝子の研究には今後益々研究者間の協力や情報交換が重要になるものと思われませんが、このサーキュラーは遺伝子実験施設間の情報交換に役立つのみでなく、広く遺伝子の研究に携わっている研究者に内外の最新の情報を提供することを目的としています。

## 遺伝子

第1号

### 遺伝子実験施設連絡会議発足によせて

昭和50年2月、カリフォルニアのアシロマにおいて、組換えDNA実験の安全性に関する激しい論争が、研究者の自主的な会議において展開され、組換えDNA実験の本格的な幕開けとなった。

我が国においても、組換えDNA実験の開始を切に願う研究者の要請が高まって「大学等の研究機関等における組換えDNA実験指針」が文部大臣告示により公にされたのは、アシロマの会議から4年を過ぎた昭和54年3月31日であった。

立ち遅れたわが国で、早急に実験が開始されるよう、昭和55年度に東京大学医科学研究所および大阪大学微生物病研究所に、翌年、京都大学化学研究所、九州大学医学部に組換えDNA実験施設が設置された。これらは、制度上、学内の共同利用の位置づけをもつものではなかった。

しかしながら、その後における遺伝子操作実験の飛躍的な発展と、わが国大学における実験従事者の増加に伴って、国として新たな対応を必要とされるにいたった。

文部省は、わが国の研究者、技術者の急速な養成を行うためには、学内共同利用の組換えDNA実験施設の整備を急ぐことが急務であるとして、その整備に力を入れることとした。

整備の方針としては、その大学に多くの優れた研究者がいて、実験施設を置く学部等が多く、学内に組換えDNA実験室を多く擁している大学を優先することにした。施設は学内共同利用とし、P3レベルでの実験、R1使用が可能となるよう建物に配慮することにした。この施設の任務としては(1)組換えDNA実験に関する研究、(2)学生、研究者に対する組換えDNA実験に関する教育・訓練、(3)学内の組換えDNA実験の安全管理、(4)各種のサービス業務、学内実験研究のコンサルタント、データベース機能等を期待した。

昭和58年度、東京大学遺伝子実験施設を皮切りに、逐年、組換えDNA実験施設が整備され、今日は、初期に設置された機関を加えて、「遺伝子実験施設連絡会議」が設けられるまでに成長を遂げた。慶賀にたえないところである。

この連絡会議が、会議の目的とするところを果されるよう、心から祈るとともに、この連絡会議が、わが国の組換えDNA実験研究について、発展に必要な提案や、積極的な活動展開の母体となれることを心から祈るものである。

文部省としては、大学における組換えDNA実験が円滑に進められるよう、諸施策を積極的に進める業務があると痛感している次第である。

文部省学術国際局研究助成課

大山 超

1986年8月

## 遺伝子実験施設の現況

### 北海道大学遺伝子実験施設

北海道大学遺伝子実験施設は本学における遺伝子実験に関する教育・研究の充実と発展をはかるための全学共同施設として、昭和60年4月に設置が認められ、昭和61年3月中旬に竣工した。建物は鉄筋コンクリート一部3階建、建築面積674.0㎡、延べ面積1497.83㎡である。

一階のおおむね半分は放射性同位元素の管理区域として設計されており、同じく一階の南側には20㎡の隔離温室が3室あって、外来性遺伝子を導入した植物の栽培や採種実験も可能となっている。一階のR I 管理区域内にはP 2、P 3 レベル実験室が1部屋ずつあり、また二階にはP 2 実験室が2室ある。

主要設備機器としては、バイオハザード対策安全キャビネット、クリーンベンチ、各種オートクレーブ、コイトロン、超遠心機、高速冷却遠心機、液体シンチレーションカウンター、振とう培養機、電気泳動装置、核酸配列入力装置、コンピューター端末装置等が現在ととのえられつつあり、昭和62年度にはDNA合成機の購入も計画している。

職員構成は、助教授(高木信夫)、助手(小保方潤一)計2名が専任職員で、施設長(谷藤茂行)は理学部生物学科教授との併任である。諸事務は理学部の事務部が担当している。

施設の運営は、理、農、医、歯、薬、工、獣医、水産各学部、大学院環境科学研究科、低温科学研究所、免疫科学研究所および本施設からの16名の委員よりなる運営委員会の議にもとづいておこなわれ、その運営委員会には、次の4種の専門委員会が置かれている。

1) 施設利用専門委員会、2) 教育専門委員会、3) 温室専門委員会、4) 遺伝子実験施設放射線障害予防安全委員会、なお、北海道大学組換えDNA実験安全委員会に本施設から施設長が委員として参加しており、助教授が本施設の安全主任者となっている。

### 東北大学遺伝子実験施設

本年2月の第1回国立大学遺伝子実験施設長会議の折には昭和61年度概算要求中のため同施設設置準備委員会のワーキンググループ委員長である農学部教授水野重樹がオブザーバーとして出席した。同施設の設置がその後4月5日付けで認められたため、国立大学としては10番目の施設として今後正式にこの連絡会議に参加できることになった。

東北大学では昭和57年7月以来、農学部ならびに学内の遺伝子関連研究者の交流機関である東北大学遺伝子研究会を中心に遺伝子実験施設の設置に向けて話し合いを行って来た。昭和59年4月に農学部長を委員長として、関連11部局(理、医、歯、薬、工、農の各学部、教養部、農学研究所、抗酸菌病研究所、非水溶液化学研究所、応用情報学研究センター)からの委員と組換えDNA実験安全委員会委員長を加えて設置準備委員会を作り、昭和60年度から概算要求を行って来た。この間に昭和59年8月には組換えDNA実験講習会の開催、昭和60年4月から農学部で遺伝子工学概論の開講、同年7月にはバイオサイエンストレーニングコース(文部省特定研究渡辺班主催)の開催、昭和60年度からTURNS (Tohoku University Research Networks)の一環として遺伝子工学グループの発足などと遺伝子関連のバイオサイエンスに対する積極的な取組みが始まり、施設の設置が待たれていた。

現在、設置準備委員会とほぼ同様の構成メンバーからなる運営委員会が活動を始めてお

り、初代施設長として農学部長川崎健教授が選出された。同委員会のメンバーによる助教授選考委員会は既に数回の審議を重ね、今秋までに施設の専任助教授を選び、その後、助手の選考に移る予定である。また、同委員会の建設に関するワーキンググループと事務局施設部との間で再三にわたる建設計画の細部の相談が進められており、本年9月には3階建て、総面積約1500㎡の施設の建設が農学部構内で開始される予定となっている。施設が機能を開始した暁には組換えDNA実験基礎コース(1回20名、10日間)を年に3回、関連技術講習会を年に3~4回開催するほか、随時の研究指導や施設教官との協同研究などが活発に行われるものと期待される。

### 筑波大学遺伝子実験センター

筑波大学遺伝子実験センターは昭和61年3月にオープンし、現在既に15の研究室が入り実験を行っている。スタッフは教授1名(センター長)、講師2名、技官1名の計4名から成る。建物は2階建てで、床面積は1階2階合せて1400㎡あり、P 3 実験室が1つ、その他の実験室はすべてP 1・P 2 レベルである(図参照)。またアイソトープ(R I)施設も含んでおり、R I 専用のP 1 及びP 2 実験室が1部屋ずつあるが、現在のところR I 専任技官がついていないため動いていない。利用申請人数は教官を含め約100名だが常時利用者はその7割程度である。しかし、アンケートの結果、1、2年後にかなりの人数増加が予想される。

本センターは通常の研究の他、1年に1度、バイオテクノロジーレクチャーコースとトレーニングコースの実施を計画している。レクチャーコースは本年度は9月を予定しており、講師として学外研究者5名、学内研究者1名を招待し、最近のバイオテクノロジーに関する話題について講演してもらう予定である。またトレーニングコースは11月に1週間にわたって行い、受講者は国内研究者10名、大学院学生10名、国外研究者5名の計25名を対象としている。

### 筑波大学遺伝子実験センター部屋割り

研究分野	実験室面積(単位)	教官名	実験従事者数(人)
動物発生工学	0.5	田仲 可昌 柳沢嘉一郎	5 5
遺伝子発現	0.5	岡田 典弘 岡田 益吉	7 2
動物遺伝子	1	大島 靖美 渡辺 良雄 鈴木 怒	11 3 2
微生物培養	1/3	宮崎 均	6
微生物遺伝子	1	山根 國男 井柳 堯	16 1
医薬品生産	1	村上 和雄 大橋 力	9 6
植物遺伝子	1	原田 宏 内宮 博文	9 6
植物細胞工学	0.5	鎌田 博	9
合計	5.8		97

1単位は7.5×6.85㎡

## 東京大学遺伝子実験施設

本施設は、東京大学における組換えDNA実験に関する研究、教育ならびに組換えDNA実験の促進と安全の確保をはかる学内共同教育研究施設として、昭和58年4月1日に設置され、以下の研究教育活動を行なうことを任務としている。

1. 組換えDNA技術を用いた独自の研究の推進
2. 関連分野の研究者との共同研究の推進
3. 組換えDNA技術に関係した講習会等の開催
4. 組換えDNA実験指針に関する情報の収集

組織は、施設長(併任)の下に研究部(専任教官、講師、助手各1)をおき、運営委員会(全学レベル)、理学部協議会、理学部専門委員会がその運用の責任を負う。当分の間、運用、事務については、理学部で行なう。

施設(建物面積922㎡)の建築は、遺跡調査のため、申断されていたが、昭和61年11月末日引き渡しをめざして進行中である。

建物が未完成のため、活動に大きな制約があるが、理学部の植物学、生物化学、物理学の各教室の一部を借用し、以下の活動を行なっている。

### (1). 研究活動

専任教官によって「高等植物における形態・機能分化の分子遺伝学的研究」を種々の援助、協力を受けて、実施している。

### (2). 教育活動

理学系大学院講義、大学院生受け入れ、学外よりの研究生受け入れ、セミナー、講演会の開催などの活動を行なっている。

### (3). 調査活動

国内外における組換えDNA実験の指針関係資料の収集および運営状況の調査を担当している。

### (4). 啓蒙活動

学外講演会などに講師を派遣している。

## 東京大学医科学研究所附属遺伝子解析施設

当施設は昭和55年4月に設置され、昭和61年7月1日現在助教授1、助手1、技術職員1の計3名が定員である。施設長は施設の助教授山本正幸が併任しており、施設運営のために医科研教授・助教授6名からなる運営委員会が設けられている。また計算機関係業務のために助手1名の兼務を依頼しており、プラスミド保存事業、合成ヌクレオチド供給事業のためには非常勤職員(アルバイト)2名を雇用して、定員で手の回らないところをカバーしている。

施設における組換えDNAの先導的研究としては、酵母における新しい宿主ベクター系の開発、および組換えDNA技術を用いた細胞増殖制御機構の研究、の2者を重点的に行なっている。さらに当施設は次のような事業を担当してきている。

### 1) P3設備維持・管理。

P3・P2実験者および室内設備利用者数：年間延約300名。

### 2) 組換えDNA関連講習会。

昭和56年度～60年度において、学外者対象の講習会を計6回開催。

3) 合成オリゴヌクレオチド供給。  
(バイオがん総括班との共同事業)  
年間約150本供給。

4) がん遺伝子プローブ保存事業。

(がん特資材班との共同事業)

代表的がん遺伝子クローンを収集。プローブとして供給可能な態勢を整備中。

5) VAX計算機による遺伝情報解析システムの維持・管理。講習会の開催。所外利用登録者(25名+新規予定者15名)に対する情報サービス。

## 金沢大学遺伝子実験施設

### I. 施設の概要

設置 昭和60年4月1日

位置 金沢市宝町13番1号

定員 助教授 1人 助手 1人 計2人

建物 R4 1,497㎡ 昭和61年3月25日竣工

### II. 施設の業務内容

#### (1) 研究活動

ヒト及び哺乳動物の各種遺伝子研究とその医薬等諸領域への応用を目的とした研究を行う。

#### (2) 教育・情報交流

教育 遺伝子研究推進と安全確保のため、教官、学生、大学院学生、社会人を対象に講習会、公開講座を開設し遺伝子教育を行う。

情報交流 北陸地域における遺伝子研究の推進を目的とした情報、技術交流及び医学・薬学領域の遺伝子研究、発癌機構の遺伝子研究など先端研究分野の情報交流。

#### (3) 安全管理

遺伝子研究の安全性確保のために、安全教育及び学内施設(P1、P2)の安全管理を体系的に進める。また、応用開発に関する社会的、倫理的側面についての検討を行う。

#### (4) サービス活動

各種宿主・ベクターの収集及び配布、技術、情報サービス。

#### (5) 遺伝子・細胞株収集保存

がん遺伝子を中心としたヒト及び高等生物遺伝子の収集、各種細胞株の収集保存。

#### (6) 動物飼育

遺伝子研究に必要な動物の飼育、管理を行う。

### III. 本学における研究活動の現状等

#### (1) 研究の経過と現状

昭和54年以来P2レベルの実験室が、がん研究所、薬学部、医学部に設置され、細菌、高等動物、ヒト及び植物の遺伝子クローニングが行われている。これら遺

伝子はDNA複製、ウイルス、発癌免疫、その他生理活性にかかわるもので、これら諸領域研究において大きな成果をあげている。

(2) 施設における研究とプロジェクト

(a) 専任教員は昭和60年より次の研究を独自に行っている。

イ. 染色体DNAの複製開始反応とその調節に関する遺伝子機能の解明。

ロ. 蛋白質工学の技術開発。

(b) 学内研究者と共同して行うプロジェクト研究としては次のものが目下検討されている。

イ. 甲状腺ホルモンによって調節される遺伝子群のクローニングとその情報発現機構。

ロ. がん特異表現形を支配する遺伝子の構造解析。

ハ. 植物ホルモン合成系遺伝子のクローニング。

(c) 施設開所(9月)以降予定されるプロジェクト研究は次のようである。

イ. がん遺伝子の探索と機能の解析。

ロ. がん化に伴う染色体の変化。

ハ. 遺伝病の遺伝子解析。

ニ. 免疫機構に関する遺伝子解析。

ホ. 光受容体蛋白質遺伝子の構造と発現機構。

ヘ. 植物染色体における反復配列の構造と機能。

IV. その他

(1) 施設の管理・運営について

以下の2委員会がすでに発足し管理・運営に当たっている。

(a) 遺伝子実験施設管理委員会(学長を委員長とし、各部署長で構成)

(b) 遺伝子実験施設運営委員会(施設長を委員長とし、関連部局委員で構成)

本施設の具体的運営はその大綱を運営委員会で決定し、学内利用等目的に応じた具体策は、それぞれ専門委員会を設けて検討している。現在発足し、あるいは今後設置される専門委員会を以下に記す。

イ. 使用規程作成専門委員会(4月発足)

ロ. 動物室使用細則作成専門委員会(4月発足)

ハ. 教育専門委員会(準備中)

ニ. 利用者専門委員会(準備中)

(2) 人、設備、運営費の必要性

生命科学領域の遺伝子研究の開発及び安全性の確保を目的に、研究、教育、安全確保及びサービス業務を遂行するため人員の整備、また、本実験施設の運用・管理を充実するために設備、運営費を必要とする。

名古屋大学遺伝子実験施設

名古屋大学遺伝子実験施設は、昭和59年度に創設された学内共同教育研究施設で、既設の化学測定機器センターおよびモノクロン抗体製造実験室の上階(4、5、6階、999.4m<sup>2</sup>)に位置する。専任職員は、教授(施設長)杉浦昌弘と助教授篠崎一雄の2名で、主な業務は次の4つである。

1. 安全管理。組換えDNA実験安全委員会と密接な連絡をとり、学内で行われる組換えDNA実験の安全確保の中心となる。

2. 教育訓練。専任職員が中心となり、学内外の研究者の協力を得て、全学の研究者や学生を対象として、組換えDNA実験および関連技術の初歩及び専門課程の教育訓練を行う。

61年度はすでに、技術講習会として2回、「DNA合成機によるオリゴヌクレオチドの合成」と「マイクロコンピュータによる遺伝情報・データベースの検索」、及び技術セミナーとして「高速電気泳動法」を行った。

3. 共同利用。最新の機器等を整備して学内の研究者の利用に供し、本学の遺伝子研究の推進を計る。

(a) P3実験室(34.2m<sup>2</sup>)

(b) DNA合成機、気相プロテインシーケンサー、ペプチドシンセサイザー

(c) 組換え体専用ジャーファメンター

(d) 遺伝子データベース、遺伝情報解析用ミニコンピュータ(Micro VAX II)

(e) DNAバンク

4. 研究開発。専任職員は、本施設の大学院生(理学研究科生物学専攻遺伝子解析)と研究生と協力して、施設独自の研究及び技術開発を行う、現在のテーマは次の3つである。

(a) 光合成を支配する遺伝子の構造と発現に関する研究

タバコ、イネ、クロレラなどを用いて、核および葉緑体ゲノムの光合成を支配する遺伝子並びに葉緑体の構成成分の遺伝子をクローニングし、その構造と発現(転写、スプライシング、プロセッシング、翻訳、修飾など)の機構を明らかにし、ついで核と葉緑体間の遺伝的相互作用の分子機構を解析し、作物の光合成能力を向上させる分子育種のための基礎知見を得る。

(b) 植物有用遺伝子の探索

イネなど作物の育種上有用形質を支配する遺伝子、および有用物質の生産を支配する遺伝子を探索し、クローニングして構造と発現様式を明らかにする。

(c) ラン藻の宿主・ベクター系の開発と応用

ラン藻の種々の宿主・ベクター系を開発し、光合成の遺伝学的研究のモデル系、および食糧・飼料として並びに有用物質生産系(水素ガス、窒素肥料など)としてラン藻の利用を計る。

京都大学化学研究所付属核酸情報解析施設

京都大学化学研究所には昭和54年度に全学の共同利用を目的としたP3レベルの組換えDNA実験室が設置され、昭和56年度に現在の核酸情報解析施設となった。当施設の事業は、施設設備を全学の利用に供するほか、組換えDNA実験の基礎としての遺伝情報の解析研究、組換えDNA研究に関する情報の収集、組換えDNA研究の発展に必要な基礎技術と材料の開発研究、に重点をおいている。また研究技術の研費と普及を目的として、毎年重要課題について研究会、講習会等を実施している。昨年度までに行なった主な研究会、講習会の課題は次のとおりである。

核酸の一次構造解析法(研究会、55年12月15日~16日)、Maxam-Gilbert法を用いたDNA塩基配列決定法(講習会、55年12月16日~22日)、転写と翻訳領域の解析法(研究会、57年2月25日~28日)、コンピュータによる遺伝子構造解析法(講習会、58年1月20

日～22日、59年1月22日～25日)、遺伝子クローニングと in vitro mutagenesis (講習会、58年4月17日～24日)、Dideoxy法を用いたDNA塩基配列決定法(講習会、59年1月18日～21日、4月25日～28日)、組換えDNA実験技術の進歩(研究会、60年2月22日～23日)、ネマトーダを用いた発生過程の遺伝子解析法(講習会、60年7月8日～13日)、染色体の構造解析法(研究会、61年2月7日～8日)。

施設の組換えDNA実験室設備等は、設置当初から全学の研究者、特に本部地区の医学部、理学部、農学部研究者によって頻りに利用されてきたが、実験指針改訂後は宇治地区研究所による利用が中心となってきている。

近年、動植物個体を宿主とする組換えDNA実験の必要性が高まっている。施設設置時には予測できなかった実験であり、当施設は微生物宿主ベクター系を対象とした安全実験設備しか保有していないため、この種の実験設備の設置が課題となっている。

施設の専任職員は、助教授1名、助手1名、技官1名であるが、これだけでは上記事業の遂行や実験設備、アイソトープ、コンピューター解析システム等の管理が困難であるため、現在化学研究所分子生物学部門が協力して施設の運営にあたっている。

#### 大阪大学微生物病研究所付属共同無菌実験施設

当施設は組換えDNA実験を行うとともに大阪大学内外の組換えDNA実験の普及をはかるため学内外の研究者を対象に研究および教育訓練を行う目的で昭和54年度大阪大学微生物病研究所敷地の一角に設立された。

現在、構成員は施設長(教授・兼任)角永武夫と、助手白波瀬勲の計2名で研究所の別館3階建の1階を使用しており、施設の延面積は380㎡である。主要な設備品としては、自動細胞分別装置1台、安全キャビネット3台、CO<sub>2</sub>-インキュベーター3台、超遠心器1台、高速遠心器2台、超低温槽1台、液体シンチレーションカウンター1台などがある。

当施設の実験室は所内および学内の研究者によって組換えDNA実験にフルに使用されており大変手ぜまになっている。同じ棟の3階にある微生物病研究所付属発癌遺伝子検索細胞センターと共同でミニ・コンピューターを用いる遺伝情報解析プログラムを導入し、所内外の利用に供しつつある。その他の活動としては、毎年1、2回、学内外の研究者を対象に、遺伝子組換え実験に関連した講習会、講演会を催している。昨年度は「遺伝子情報解析に関する講習会」を5日間に亘り開催し、大勢の参加希望者の中から所内7名、学内6名、学外から2名の講習生がDNA塩基配列の新しい決定法、パーソナルコンピューターを用いた遺伝子構造解析について講習を受けた。昭和61年度にはミニ・コンピューターを用いた遺伝子解析プログラムについて2回の講習会を開催する予定である。

#### 九州大学遺伝情報実験施設

九州大学遺伝情報実験施設は昭和60年4月より全学の共同利用教育施設となり、より巾の広い活動を目指すこととなった。スタッフは教授1、助教授1に加え、学内の協力により助手定員1名を期限つきで与えられている。

現在、教授(施設長)・榎佳之、助教授・服巻保幸、助手・服部正平の3名である。当施設の活動は教育指導、研究推進サービス業務、研究活動に分けられる。

教育指導活動：組換えDNA実験及びその基礎となる分子遺伝学の講義を医学研大学院生

に2時間×5回、医学部学生に2時間×4回(61年度予定)行っている。実験技術の指導は個別に希望者に行っている。年間の当施設の利用者は技術習得のためのものと後述の研究活動のため利用するものを含め、59名である。そのうち、年間を通して常時利用する者は22名である。利用者は本学医学部と病院を中心に理、農、薬学部、生医研の他、長崎大、大分医大、愛媛大、宮崎大、産医大、琉球大などにわたっている。

研究推進サービス業務：技術指導の他に約3年前にスタートした公用DNA塩基配列解析データベース(GENAS)の維持と管理、更新を行っている。DNA及び蛋白データベースを年間3～4回にわたりupdateする他に、適宜応用プログラムの追加、改訂を行っている。利用者は九州大を中心にN1ネットワークにより東北大から鹿児島大、長崎大まで全国に広まっている。また、一昨年よりヒト遺伝子を中心にクローン化遺伝子、およびHost-Vector系のバンク事業を行っている。年間利用者は数十件である。尚、昭和56年度より4回行った技術講習会は現在は学内を中心に個別指導型に切り換えている。

研究活動：61年度より医学系分子生命科学系大学院の協力講座となり大学院生を受入れることとなり、スタッフを中心とした研究活動も展開している。主たるテーマとして遺伝病の病因解析(主にアミロイドーシス、サラセミア、メトヘモグロビン血症)、ヒトゲノムの構築と進化(ヒト-KpnIファミリー)、遺伝子発現制御の分子機構(ラット $\alpha_2$ マクログロブリン遺伝子)、蛋白工学への遺伝子工学的アプローチ(Ca<sup>2+</sup>発光蛋白アクアリン)などを行っている。これらの研究の原著論文としての発表は1985年は9件であった。

当施設の抱える問題：利用希望者の増加と、Transgenic mouse等の新しい技術に対応するためにスペースと人員の不足が大きな問題となっている。スペースは現在636㎡と他大学の半分又はそれ以下であり、人員も助手の定員化と共に、技官、教務員の不在が活動の大きな支障となっている。

## 第1回遺伝子実験施設連絡会議について

昭和61年2月28日午後1時30分より名古屋大学本部第2会議室において、第1回国立大学遺伝子実験施設長会議が開催された。各施設より谷藤、村上、飯野、内田、亀山、中埜、高浪、水上の施設長のほか、水野教授（東北大学）、杉浦教授（名古屋大学）、山本助教授（東京大学）三好淳助手（大阪大学）と文部省学術国際局大山調整官が出席した。はじめに開催大学の中埜施設長から挨拶があった後、下記の次第で議事が進行して承認された。新しく遺伝子実験施設連絡会議が設けられたので、本会議を第1回遺伝子実験施設連絡会議とすることになった。なお、会議終了後、名古屋大学遺伝子実験施設を見学した。また、次回は明年東京大学で開催することになった。

### 議事

#### 1. 組換えDNA研究組織連絡会議

内田施設長より組換えDNA研究組織連絡会議の由来および開催情況について説明があり、その後国立大学に遺伝子実験施設が整備されてきたので、この会議を新しい遺伝子実験施設連絡会議として発展的に解消させてはどうかという提案があり、異議なく承認された。

#### 2. 遺伝子実験施設連絡会議

飯野施設長より新しく設ける遺伝子実験施設連絡会議について説明があり、運営要綱案が提示された。種々意見を交換した結果、二、三原案を修正の上運営要綱（別項参照）を承認した。

#### 3. 遺伝子実験施設の現状と問題点

各施設長より施設の現状と問題点について報告（本誌に掲載）があり、大山調整官より問題点の対応について示唆があった。

## 遺伝子実験施設連絡会議運営要綱

### 1. 目的

遺伝子実験施設連絡会議（以下「連絡会議」という。）は、学術審議会の建議「大学等の研究機関における組換えDNA実験の進め方について」（昭和53年11月28日学術審議会第21号）の趣旨に沿い、我が国の大学等の研究機関における組換えDNA研究の推進及び教育の充実を図ることを目的とする。

### 2. 構成

連絡会議は、別表に掲げる遺伝子実験施設及びその関連施設をもって構成する。なお、新たに施設を追加する場合は、連絡会議の議を経て行うものとする。

### 3. 組織

- (1) 連絡会議は、各施設から選出された各2名の委員（施設の長及び専任教官）及び組換えDNA専門委員会主査から推薦された委員若干名をもって組織する。
- (2) 連絡会議に幹事1名を置き、委員の互選によって定める。幹事は、連絡会議の事務を総括する。
- (3) 幹事に事故があるときは、幹事があらかじめ指名する委員が、その職務を代行する。
- (4) 連絡会議は、原則として、年1回開催する。
- (5) 連絡会議は、開催大学の施設の長が召集し、その議長となる。

### 4. 審議事項等

連絡会議は、その目的を達成するために次の各号に掲げる事項を審議するとともに、組換えDNA専門委員会との連絡を密にして、その円滑な遂行を図る。

- (1) 実験従事者に対する実験指針に沿った組換えDNA実験技術の教育・訓練に関する調整
- (2) 組換えDNA実験に関する内外の情報の収集、整理及び提供に関する調整
- (3) 組換えDNA実験に広く利用される宿主-ベクター、制限酵素、合成DNA等の標準的試料の作成、収集、保存及び配布に関する情報交換
- (4) 我が国における組換えDNA研究の推進に有用な遺伝子の収集、保存及び配布に関する情報交換
- (5) その他、組換えDNA研究の推進及び教育の充実に必要な施策の提言

### 5. 雑則

この運営要綱に定めるほか、連絡会議の運営について必要な事項は、連絡会議が定める。

別 表

国立大学遺伝子実験施設連絡会議  
北海道大学遺伝子実験施設  
東北大学遺伝子実験施設  
筑波大学遺伝子実験センター  
東京大学遺伝子実験施設  
東京大学医科学研究所附属遺伝子解析施設  
金沢大学遺伝子実験施設  
名古屋大学遺伝子実験施設  
京都大学化学研究所附属核酸情報解析施設  
大阪大学微生物病研究所附属共同無菌実験施設  
九州大学遺伝子実験施設

遺伝子 第1号

---

昭和61年8月発行

編集 名古屋大学遺伝子実験施設

発行 遺伝子実験施設連絡会議

---